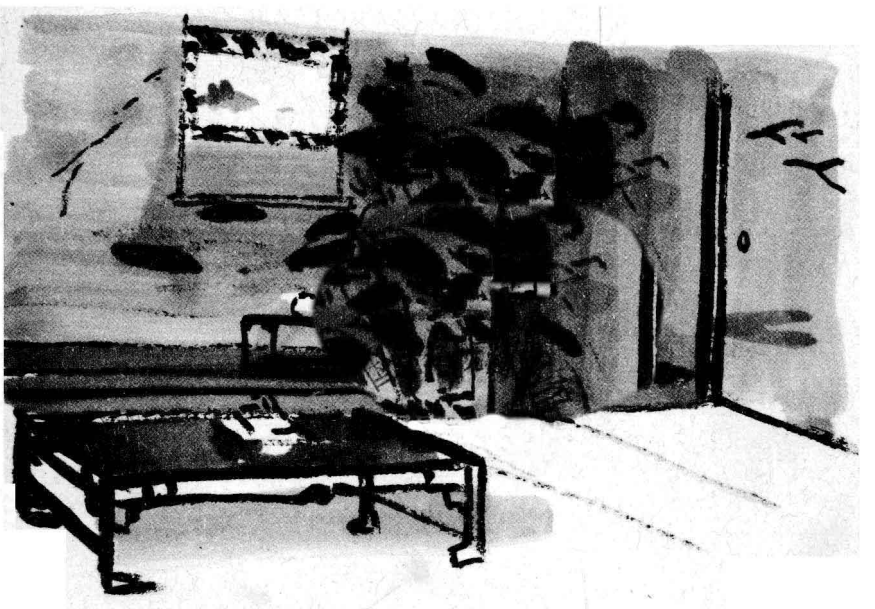
花紋

山崎豊子

花紋

山崎豊子



中央公論社

花紋

定価四九〇円©

昭和三十九年六月一日　印刷
昭和三十九年六月十日　発行

著者　山崎豊子
装幀者　小磯良平
発行者　宮本信太郎
印刷者　柳川太郎

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

花紋

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

第一章

松の枝が鬱蒼と枝を拡げた小暗い屋敷の中には、女主人であるそのひとと、老婢の姿しか見受けられなかった。老婢は、そのひとのことを、御寮人さまと呼び、侍くように仕えていた。

御寮人さまと呼ばれるそのひとは、白髪をまじえた銀色の髪を庇髪のようにふっくらと膨らませ、やや抜き衣紋にぬいた衿元にしぼの厚い縮緬の衿を重ね、長目に着附けた裾に、小皺一つない真っ白な足袋をぴしりと履きしめていた。大家の御寮人さまと呼ばれる人に共通する脇たけた品とゆったりしたもの柔かさに包まれていたが、どこかに街中の商家の御寮人と異る小ゆるぎのない厳しさが備わり、大阪近郷の大地主の御寮人らしい毅然とした烈しさが、その小柄な白い肌の下から感じ取られた。

私が始めてこの家を訪れた日は、大阪が最初の大空襲で、大阪の中心地である船場、島之内が僅か四、五時間で焼き払われてしまった夜であった。焼夷弾が絶え間なく落下し、猛火が街を埋めている中を必死に逃れ、大阪から阪神国道を徒歩で御影駅まで辿りつき、松林に囲まれたその家を見つけた時は、間違いなく行きつけた安堵より、そこだけが、戦争に疲れ果て、家を焼き払われている多くの人間と全くかけ離れた、よそよそしいほどの静けさに包まれていることに、不安な身じろぎを覚えた。

その時も、御寮人さまと呼ばれるそのひとは、老婢に侍かれるようにして私の前にたち、焼穴のついた衣服と泥塗れになった私の足元に暫く眼を止め、

「お家がお焼けになってしまったのね、ご両親さまとお妹さまは――」

動揺のない静かな声で聞き、瞬きもせず、私の顔を見詰めた。豫てから大阪が空襲され、万一、私の家が戦災に会った時は、この家へ避難することになっていたのだった。両親と妹は、罹災したその足で、姫路の田舎に向って避難して行き、大阪の学校に学業の残っている私だけが、この家を頼って来たことを話すと、

「それでは、どなたもお傷無う――」

そう云い、ちょっと言葉を切ってから、私を請じ入れた客間の窓を大きく開け、まだ真っ赤に燃え熾っている大阪の空を望み見るように白い咽喉を仰向け、

「まあ、空が真っ赤に焼け焦げておりますのね、まるで大阪城が炎上しているような、そんな燃え方――、あの時も、今夜と同じように空一杯に火簾が降り、焔が地獄のように空を舞い、苦しげに熱く、焼け焦げたのでございましょうか――」

澄み透った声であったが、かすかな昂りが声の中に熱っぽく籠っていた。何万戸かの家が一夜にして焼き払われ、幾十万人かの人間が猛火の中を死にもの狂いで逃げのび、その焔が大阪から二十五キロ離れている御影の空まで赤黯く染めている時に、遠い昔の大阪城炎上を連想し、空襲を華麗な絵巻物のように観ているそのひとの言葉の中に、私は陰惨な響きを感じ取った。

その翌日から、私はこの家の一室を借り、女ばかり三人の生活が始ったのだった。

百坪近い家の中は、殆ど雨戸を閉して不用部屋にしてしまっていたが、そのひとの部屋がある一角は、足をすべらすほどに拭き磨かれ、廊下の端々にまで花が活け込まれていた。私の部屋は、鉤の手

に曲った二階の西南寄りの端であったから、そこから同じ二階の東南角にあるそのひとの居間が、中庭の高い樫の木の葉越しに見えた。東南に向って大きく切られたガラス窓は、何時も内側の明り障子で閉されていたが、午前中の僅かな間だけ明り障子を開けて部屋一杯に光を入れ、鏡台の前に坐って、丹念な髪の手入れをするうしろ姿が、額縁に入った一枚の絵のように眺められた。十畳ほどの座敷の真ん中に、塗物の古風な鏡台を据え、肩に紅い紅絹の肩布を掛け、銀白色の長い髪を、紅い肩布の上へ糸を引くように梳って行くそのひとの音のない静かな美しい姿は、私が半月前に家を失ったことも、何時、空襲警報が鳴り響くか解らぬ切迫した現実も、信じられないような異様な錯覚を覚えさせた。しかし、古風な鏡台の蓋が閉じられ、そのひとの肩から紅絹の肩布が除かれ、明り障子が閉されると、私は酔いから醒めるように現実に引き戻され、防空頭巾をかぶり、モンペを履いて、半ば焼野ガ原になった大阪の街へ出かけて行った。

焼け残った学校は既に学徒動員令が下り、授業は殆ど顧みられず、校舎の中にミシンが持ち込まれ、軍衣の縫製作業が行われていた。家政科の生徒が指導班長になり、私たち文科の生徒も、不器用な手つきで分厚な軍衣の縫製にかかっていたが、私はその単純で重苦しい仕事の合い間に、姫路の田舎へ避難し、そこで疎開生活をしている両親と妹のことを思い出していた。一週間に一度、届けられる両親からの便りの中には、番頭や丁稚を使って手広い商いをして来た両親が、馴れない畑仕事をしながら主食の補給をし、薪割までしていることや、妹が田舎の小学校をいやがっていることなどが記されていた。疎開先で今まで想像もしなかった不自由な生活をしている両親と妹のことを思いうかべると、そこには苛烈な戦争の現実と闘っている人間の痛ましい姿があった。私はすぐにも、両親のいる疎開先へ帰りたい衝動に駆られたが、すぐまた、戦争の影すらも見出せないそのひとの家の美しい静かな気配に心を奪われ、軍衣の作業が終ると、私は両親への思いを忘れたように、足早に松林に囲まれた

その家へ帰って行った。
窓ガラスが破れ、連結器にまで人が群った阪急電車に乗り、御影駅で降りて、雑草の生い茂った坂道を六、七丁歩いて行くと、松の樹の間にゆるやかな勾配を見せた銀鼠色の屋根瓦が見え、白塗りの壁面に数寄屋造りの窓枠が渋い紅殻色を縁取り、時たま、その窓枠にそのひとの姿が見える時がある。
そんな時は、きまってモンペをはいた老婢が広い庭の中を独りたち働いていた。よしと呼ばれている老婢は、そのひとより十ばかり齢上で六十を越えているらしい背のかがまり方であったが、体は驚くほど達者で、広い庭の手入れから、家内の掃除まで一人で切り廻し、家の奥から、よしと呼ぶそのひとの声が聞えると、どこからともなく影のようなひそやかさで声のする方へ行き、用を足す気配が長い廊下を隔てて、私の部屋にも感じ取られるのだった。用を云いつけるそのひとの声は低くて聞き取れなかったが、
「はい、御寮人さま……それで、よろしゅうございましょうか……へえ、さようでございます」
関西弁の古風で鄭重な老婢の言葉使いだけが、声高に私の耳に聞えて来る。何が可笑しいのか、時時、二人の間で笑い声のたつ時があったが、その時も、そのひとの声はよく聞きとれず、老婢の声が耳に入った。そんな時は、食べものの話をしているらしく、
「はい、旬のものをとおっしゃいますのでございますか……それなら桜鯛か飯で、それはよう承知してございますけど、この節——」
美食家であるらしいそのひとに、老婢はそうしたものを入手する難しさを託ち、託ちながらやはり無理な話をしていることの滑稽さに、ふと、どちらからともなく吹き出している様子であった。しかし、そのひとの食事は、殆どの人が主食代りに馬鈴薯や玉蜀黍を食べている時節にもかかわらず、眼を瞠るような美食であった。

夕食時になり、老婢が食堂になっている階下の八畳の茶の間へ運んで行く塗物の御膳は、二の膳附き高脚台の御膳であった。小鉢やお椀の中のものまでは見えなかったが、一の膳に五品が並び、二の膳に三品が並んでいるのが廊下ですれ違う私の眼にも確められた。それだけのものを老婢のよしがどこで手に入れて来るのか、昼食時はともかく、毎日の夕食には必ず二の膳附きを運んで行き、茶の間に続いた次の間の敷居際に蹲るように坐っている老婢の姿が、廊下越しにのぞかれた。御膳を運んで行きながら、最初のうち茶の間の中へは入らず、次の間の敷居際に蹲るように坐っている老婢の姿に納得がいかず、腑に落ちなかったが、一ヵ月ほど経った或る日、そのひとの夕食に招かれて、その不審が解けたのだった。

防空暗幕に掩われた薄暗い茶の間の真ん中に高脚台の御膳を並べ、その前へ坐って私を待っていたそのひとは、私の姿を見ると、透き通るように白い顔を柔かく綻ばせ、

「この家に来られましてから一ヵ月も経ちますのに、何のお訪ねもしなくて失礼致しました。今夜は、この度の罹災の御見舞を兼ねて、ささやかな晩餐をさし上げとうて、よしにご馳走を集めるようにきつう申しつけました」

音便だけが柔かな関西訛りになる言葉で話し、そのひとは、黒漆に四季花の蒔絵を描いた塗椀の蓋を取り、小さなつぼむような唇でちゅっと白い汁を吸い上げた。白味噌の椀物であった。次に小鉢の和えものを、お箸の先でつつくようにして口もとへ運んだかと思うと、

「よし、今日の胡麻和えのお味は結構でした」

舌の上で吟味するように味い、敷居の外に控えている老婢の方を見て眼の端でやさしく笑うと、老婢はかがまった背を猫のようにまるくかがめ、

「よろしゅうございましたら、ごはんの方のお給仕を——」

老婢は膝をにじらせながら敷居を越え、そのひとと私の前に坐ってお盆でごはんをつぎ、給仕をすると、すぐ退るように敷居の外へ退って、そこでお盆を膝の上において控えた。作法にかなった見事な給仕の仕方であったが、そうした給仕に馴れない私は、せっかく御膳の上に並べられた眼を瞠るような贅沢なお料理より、伺候するようなものものしい侍かれ方に気を呑まれていた。

そのひとは、私のぎこちなさなどには気附かず、結城の対をきりっと着こなした膝の上に、お箸を持った手をやすめ、

「お料理というものは面白いものでございますね、同じ材料を持っても、作る人の気持でいろんな形とお味になり変るのでございますから——、よしの作るお料理は、どんな繊細な材料を持っても、つくりは、無骨で鄙びたものになってしまうのです。この箸洗い一つにしてもお庭の笹の葉をとってあしらっているのですが、あしらいが大まかでございます、そんな田舎風の大まかさが時々、大へん好きになる時がございますの」

そう云い、ちらりと私の方へ投げたそのひとの眼は、日頃の静謐さを破り、一陣の風が吹きつけるような強い羽搏きを持ち、近郷の土地を占有して来た家の豪毅なたけだけしさが、眼の中を掠めた。

食事が終ると、お煎茶と水菓子が出、暫くお茶の話が続いたが、話がとぎれると、つとたち上って、床脇の天袋戸棚を開け、鬱金色の包みを取り出して、私の前へ置いた。

「これ、あなたに戦災の御見舞にさし上げとうございます」

茶器にしては、平たすぎる包みであった。

「硯でございますの」

「え、硯？」

私は一瞬、耳を疑った。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

「ええ、端渓石の硯と根来塗の硯箱でございますが、少し落着かれましたらお手習いでもと思うて――」

頬に笑いがうかび、包みを私の方へ押しやった。私は包みを開けながら、明日にも再び大阪が空襲され、戦火を浴びるかもしれない時に、逸品の硯と硯箱を贈られることの奇異さを拭いきれなかった。

「お気に召しましたかしら？　それ、長くお蔵にしまっておりました古いものでございますの、お墨とお筆も、お揃えしておきました」

渋い朱漆のかかった根来塗の硯箱に、瑩玉のような濃紫色の石肌をもつ端渓石の硯がおさめられ、唐墨と仮名筆が添えられていた。硯墨に心得のない私の眼にも、それは由緒と品格を備えた品に見えた。

「まあ、美しい石、でも、硯石にはもったいな過ぎるようですわ」

眼を上げて、そう応えると、

「そうでしょうか、文字というものは、本来、瑩玉のような硯から磨り出される墨で書かれ、遺されるものではないでしょうか」

そう云い、ちらっと厳しい視線を私の方へ投げつけたかと思うと、

「つい、長くお引き止め致してしまいました、じゃあ、お寝み遊ばせ」

突き放すような冷やかな鄭重さで云い、先に席をたった。

私はそこに置かれた硯石の包みを抱えて茶の間を出ると、まっすぐ自分の部屋へ帰らず、庭に向った廻り廊下の中ほどで暫く足を止めた。四月初旬の夜であったが、蒸せるような湿っぽい暑さが籠り、広い庭の樹々さえ、あつくるしい茂みに見えた。雨催かと思えたが、空を見上げると、燈火管制の真っ暗な空に銀砂を撒き散らしたような星屑が、思いがけない近さに輝やいていた。私は罹災してから

始めて、星空を見上げたのだった。いいようのない深い寛ぎと哀しみが、不意に胸を衝き上げ、吸い寄せられるように空を見上げた時、突然、真っ赤な閃光が空に奔り、耳を劈くような警報が鳴った。

敵機の来襲を告げる空襲警報であったが、もうその時には、近くの空が真っ赤に燃え上っていた。とっさに体を翻し、長い廊下の端に見える納戸に向って走って行った。その間にも、空を裂くような爆裂音が響き、その度に空が血のように赤く染った。納戸の扉に手をかけ、力任せに引き開けようとしたが固く閉されて動かない。押し破るように揺ぶり、力を籠めて開けかけると、

「いく……い……いく子……」

人を呼ぶかすかな声が、扉の内側から聞えた。はっと耳を凝らし、扉に体を寄せかけた途端、

「どうなすったのでございます？　そんなところで――」

振り返ると、背後にそのひとが、老婢に侍かれながら、防空頭巾とモンペを着てたっていた。空を染める焔の薄明りで、そのひとの体が茜色に染まり、防空頭巾に掩われた白い顔だけが異様に青ざめていた。

「お納戸だと思って開けようとしましたの、そしたら内から――誰か――」

そう云いかけると、

「何かのお間違いではございませんかしら――、避難部屋はお蔵の中でございますわ」

あとを云わさず、そのひとは、急きたてるように私の手をひいて、納戸の横から中庭に降り、深い木立に掩われた土蔵の中へ私を誘った。

厚い壁に囲まれた蔵の中は、黴臭い湿っぽさに包まれ、時々、体にまで伝わるような爆裂音が壁に響いた。暗い闇の中で、私はさっき耳にした納戸の内の声を思い出していた。

「いく……い……いく子……」確かにあのひとの名前を呼ぶ嗄れた男の声のようであった。しかし、

あの納戸のある一角は、何時も不用部屋としてどの扉も固く閉され、そのひとや私や老婢の住んでいる処から隔った人気のない一角で、あのひとの名を呼ぶような人の住む場所ではなかった。空襲を怖れた私の幻聴であったのだろうか——。けれど、幻聴にしてはあまりに日常的な平凡な言葉であり過ぎる。もし私の幻聴に過ぎないのなら、なぜあのひとは、あのように青ざめた刺し通すような視線で私を見詰め、私の手を奪い取るようにしてあの場所から引き離したのだろうか。

また激しい爆裂音が響いた。焼夷弾に混って重量爆弾が近い距離に投下されているらしく、不気味な地響きが厚い土蔵の壁まで揺がせる。その度に、私は背骨が折れるような恐怖に襲われたが、そのひとはここへ入って来た時と同じ姿勢で私の左手を固く握りしめたまま、身動きもせずに坐っていた。気がつくと、私の手は、そのひとの掌の中でじっとりと汗ばんでいたが、そのひとの掌は、不思議なほど冷たい湿りを帯びていた。私がかすかに身じろぐと、そのひとの体もかすかに身じろぎ、私を自分の傍へ引き据えるようにさらに力を籠めて、私の手を握りしめた。まるで何かを怖れ、何かを拒んでいるような異様に強い力であった。

「よし、ちょっと外を見ておいで——」

突然、そのひとの声がした。部屋の隅に坐っていた老婢は起ち上ると、重いひきずるような音を軋ませて蔵扉を押し開けた。西宮市と思われるあたりの空一面が、火の海になって燃え上り、爆裂音がさらに激しさを加えていた。

「やはり、西宮の中心地の方が、まるで火柱がたっているようでございます、火の手がこちらへも拡ってくるようで——、大丈夫でございましょうか」

老婢の声が不安そうに震えた。不意にそのひとの起ち上る気配がし、細く開かれた扉に体を寄せ、伸び上るように、燃え拡っている東の空を見上げた。

「そう、西宮の街があんなに近くで燃えているのね、今にこちらの方にも燃え拡って来て、ここも焼けてしまうかもしれない、どこもかしこも、何もかも、灰になって、失くなってしまうのね、何も遺らなく――」

ふうっと言葉が切れ、沈むように声が落ちると、薄明りの中でそのひとは、空ろな笑いを泛べた。

その夜以来、私はそのひとの美しさと、この家の静かさに異様なものを感じるようになったのだった。あの夜の空襲で、西宮市は全焼し、周辺の工場地帯も爆破されてしまったが、この家のある御影や六甲の辺りまでは燃え拡らなかった。宏壮な邸宅の多いこの一帯は、もとの静かな落着きを取り戻していたが、そのひとは時々、二階の露台から焼野ガ原になった西宮市の方を眺め、何かを待ち構えるような苛だたしい焦りがその顔に見えた。私は、もう一度、あの夜、人の声を聞いた納戸の戸に触れ、その内を確めてみたかった。

階下の厠や、私だけが自炊をしている台所への行き帰りに、何気なく納戸の方へ近附きかけると、「どちらへお越しになるのでございます、ご用のないお部屋の方へはお運び戴きませんように、何分にも取りちらかして、お掃除が行き届いておりませんので……」

老婢の声がし、何時の間にか背後にたって、私を見ていた。そうしたことが二、三度重なると、絶えず、私の動きに眼を配っている老婢の視線を感じ取った。納戸の方へ行く私をなぜそんなに阻ねばならないのか――、私の納戸に対する興味は逆に深まって行った。

私は、そのひとや老婢に気附かれぬように自分の部屋の換気窓の陰から、絶えず納戸の方を見詰めていた。廻り縁になった廊下の庇が邪魔になったが、窓際に椅子を置き、その上にあがって、窓枠の上に取り附けられた換気窓の端から見下すと、ちょうど納戸の扉の部分がよく見通せた。私はそこにたって、毎日少しずつ時間を変えて、納戸の扉を窺っていた。昼間は学校へ出かけていたが、日曜日

は終日のように見守っていた。しかし、納戸の戸は固く閉されたままで、そこへ出入りする人影はおろか、内側の人の気配さえも感じ取れなかった。やはり、あの夜のことは、自分の幻聴であったのかもしれない。老婢の言葉も、そのひとの冷やかな表情も、用事のない場所へ近附く私に対する単純な窘めの言葉であるように思えて来たのだった。

そうしたことが半月ほど続いた或る日、私は奇妙なものを台所の一隅に見附けた。その日は、この家にとって珍しく来客があり、階上の客間の方から賑やかな人声が聞えて来ていた。私は三日前から風邪をひき、食欲を失くして寝込んでいたが、やや空腹を覚え、そっと起き上って階下の台所へ自分の食事の用意に降りて行ったのだった。老婢は客間の接待に出ているらしく、広い台所には人影がなかった。ふらつき気味の体を支え、何時ものように自分用に定められた小さな水屋を開けかけた途端、思わず、はっと眼を凝らした。水屋の手前の食器棚の戸が小開きになり、そこに丼鉢に盛った麦ごはんと乾干二尾に沢庵をそえただけの、粗末な見馴れない食膳が納められていた。

来客の接待に追われた老婢が、うっかり食器棚を閉め忘れたのであるらしい。しかし、この粗末な見馴れない食膳は、誰に出すものなのだろうか——。御寮人さまと呼ばれるそのひとの食膳は、塗の高脚台の御膳であるし、老婢が何時も台所に退って一人で食べている食器は、お膳のつかない普通のものであった。いくら食糧難の時であるといっても、まさか来客にこんな盛りきりの丼鉢の食膳を出すはずがない。私の眼に終日、暗い陽陰になっている納戸の扉が浮かんだ。その湿っぽいじめじめとした暗さと、この粗末な食膳とが、不思議なほど無理なく結びついている。

私は食事の用意を止め、自分の部屋へ帰った。階上の客間から、また華やかな女客の笑い声が聞え、老婢に何か云いつけるらしいそのひとの声が聞えてきた。宏壮な屋敷に住む美しい御寮人、華やかな客間、侍くように仕える老婢、他人を近附けない納戸、誰に出すとも解らぬ粗末な食膳——、それは、

私が誇大な妄想を抱いているのか、それとも、この家に私の知らない何かが隠されているのだろうか、私は脈絡のない奇異な思いに取り憑かれた。

それから五日目の夜、私は突然、老婢の声で起された。

「大変でございます！　ご容態が急に――、すぐ駅前のお医者さまへ走って！」

時計を見ると、午前三時であった。

「えっ！　御寮人さまが――」

驚いて飛び起きると、

「いいえ、御寮人さまでなく、旦那さまが――」

「え？　旦那さま……」

「はい、ずっとお臥せになっておられる旦那さまが急に――、いくら電話をしてもかかりませんから、すぐ走って戴きたいのです」

一瞬、愕然としたが、私はすぐパジャマの上に合オーバーを羽織って、駅前の医院へ走った。

医者を案内して帰って来ると、老婢は玄関に起って待ちうけ、私を奥の部屋へ行かさず、医者だけを奥へ案内した。私は玄関脇の板の間にたったまま、鉤の手に折れた廊下の突き当りを見詰めていた。そこからは淡い光が洩れ、異常な静けさが籠められていた。私の耳に空襲の夜、「いく……い……いく子……」と呼んだ嗄れた男の声が甦り、今、その声の主が、突然、現実の姿になって、そのひとと老婢と医者に看取られているのだと思うと、私は不気味な衝撃に襲われた。

人の気配がしたかと思うと、そのひと自身が医者の黒い鞄を持って、玄関まで送り出して来た。

「大へんお気の毒ですが、老衰に加えて、栄養失調で――、この節大へん多いケースで、老衰しておられると、よほど食事に注意していても、つい栄養失調になりがちなものです、急なことでお役にた

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook